シリーズ

西淀川記憶あつめ隊 Vol.13

おもちゃづくりのボランティアとして活躍している「シゲさん」に西淀川で育った子供時代について語ってもらいました。

中田　重幸さん

2015年4月9日
聞き取り

◆鉄くずひろい

小学生の小遣い稼ぎは「鉄くずひろい」だったそうで、「歌島の府営住宅は工場やったから旋盤の屑（ザラリコ）が埋まってる。府営住宅の庭を掘らせてもらったり、スーパーナショナルの前は朝日電機やったから真鍮が埋まってる。真鍮は鉄より高かったからもうかったんよ」と、おこずかいは親からもらうのではなく、自分で稼いでいたそうです。

◆工場への配達のお手伝い

お父さんのお仕事は機械工具の仲卸で、中田さんは中学生のころから鉄板やナットを自転車に積んで西宮などに届けるお手伝いをしていたそうです。また、お母さんが栄食堂というお店を営み、お好み焼やかき氷、うどん、丼、弁当などを作っており、中田さんはこの出前も手伝っていました。当時は淀川製鋼が現在の歌島プラザにあり、出前を持っていったことから、淀川製鋼でアルバイトをすることになったそうです。「当時はプラスチックなんてないからタライやコップといった琺瑯（ほうろう）の器が多くて、プレスするのをやらせてもらったり、色塗ったりしてたわ」とのこと。また、「近くにあった製薬会社からは青い煙や黄色い煙がでて、臭かった。当時からトタン屋根が傷みやすくて、防火用水で飼っていた金魚も死んでしまった。祖母も公害のためかぜん息だった。」と、工場に近いからこその暮らしぶりを教えてくれました。

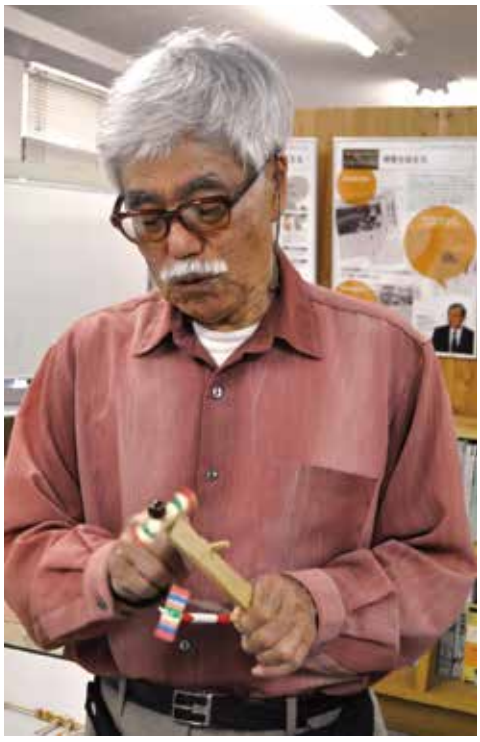
学童疎開先から出した手紙

◆学童疎開から西淀川へ

中田重幸さんは1936年生まれの79歳です。戦争が終わったときには国民学校の3年生。海老江西国民学校（現：海老江西小学校）から広島に集団疎開をしていましたが、戦争中に国道2号線沿いにあった自宅が建物疎開で取り壊されていたために、西淀川の野里に移り住むことになりました。

◆おもちゃ作りへの思い

中田さんは、三洋電機の代理店の営業や自動ドアの営業マン、大学職員を経て、現在はおもちゃづくりのボランティアを行っています。「ものづくりは、小学校の先生から学んだ。自然いっぱいのとこで育ったし、ただでは起きひん経験があったから。いろいろ考えるんは生き抜くための知恵。役に立つんやったら少しでもおもちゃづくりを伝えていきたい」と楽しそうに笑ってくれました。林



中田さんが作っているおもちゃの数々。江戸時代のおもちゃを現代風にアレンジしています。